

山梨県小淵沢町大東豊区 「開拓之碑」

山梨県の北西部、長野県境の北杜市小淵沢町は交通の要衝で、JR中央本線と小海線に分岐点となる駅や、中央自動車道のインターチェンジがある。高原の観光地として、多方面から観光客が訪れる。同町北部の大東豊（だいとうほう）区（旧・北巨摩郡小淵沢村）は戦後開拓地で、大富、東和、豊畑の3地区から成り立っている。

同県では、八ヶ岳・富士山山麓などが開拓地に指定された。小淵沢開拓地は八ヶ岳の中腹に位置し、標高約1千メートルと高い。終戦直後の1945（昭和20）年9月から、戦災者、復員軍人・引揚者ら約90戸270人という大所帯が入植した。広い山麓のうち、271町歩が配分された。

仮設の小屋での生活が始まった。農業の経験者が少なかったため、入植者は長時間の労働を強いられた。冬は北風で寒さが厳しく、開墾作業ができず、出稼ぎに行った。

ライ麦、雑穀、豆類などの作付けを行った。開拓初期は、自分たちが食べるのに精一杯で、販売して現金収入を得ることはできなかった。

48年、4つあった帰農組合が合併して、小淵沢開拓農協を設立。50年に電気が導入されたが、全戸には配電が行き渡らなかった。飲料水が乏しい地域でもあった。そのため、離農者が多かった。しかし、残った人たちは、新しい農村の建設に情熱を燃やして努力した。

53年、八ヶ岳山麓が集約酪農地域として国の指定を受け、多くの開拓農家が乳牛を飼育するようになった。同開拓農協は、穀物栽培から、酪農と高冷地野菜栽培への転換を推進した。

64年に3部落がまとまり、大東豊区が成立した。翌年、水道の整備で断水の心配が解消され、生活は安定に向かった。

大東豊公民館の敷地内に、開拓記念碑がある。79年10月に建立されたもので、碑銘は「開拓之碑」。裏面には、各帰農組合の入植日、入植者数、氏名が刻まれている。

